

作品の心

野末綾子

演奏学科鍵盤楽器専修（ピアノ）4年

皆さんは新しい作品を弾く時にまず何をすることから始めるだろうか？私は、まずその作品の背景や作曲家の思いなどを調べる。そのような時に、お勧め！

この本はシリーズものであり、作曲家ごとにその主要作品が豊富な譜例つきで解説されている。また、その作曲家の生涯も記載されており作品の理解の一助として役に立つのではないだろうか。

今回は「ブラームス」のシリーズなのだが、私はこの本によって本当の意味で音楽と向き合うことができた。それまでの私は作品を弾く時何も考えず自分が感じたままに表現して、その作品に作曲家のどのような思いが込められているかなど考えようとしていなかった。しかし、ある時自分が弾いている作品をほとんど理解していないことに気付き、このままではいけないと焦りを感じた。そして、作品の事を知るにはどうすれば良いのかを考えて解説集を手にとった。徐々に、作品にはその年に起こった出来事が描かれていることやブラームスがどのような思いでその作品を書いたのかなどということが明らかになっていった。作品について理解できると、自分の感情を込めやすくなり、作

品の背景を思い浮かべた上で作曲家の思いを代弁したいという気持ちになってくるものだというところをこの時初めて実感した。

私に作品を理解する面白さを教えてくれたのは、この本である。この本にはブラームスの生涯も記載されているため、まだブラームスについてよく知らない方でもこの本を読めば彼がどんな人でどのような性格なのか、また、どのような人生を送ってきたのかなどということがよくわかる。そして、作品一つ一つにその作品の作曲年、初演日、国、演奏時間が記載され、その作品の主題を抜き出して作品全体の構成を譜例つきで解説しているため、難しい作品でも主題がわかりその作品の見方も変わるのではないだろうか。

作品を理解するための本をお探しい方は是非この本を手にとってみたい。この本だけではなく、他の作曲家シリーズを読んでみると知らなかった作曲家に興味を持ちたり、弾いてみたい作品が見つかったりするかもしれない。私もまだまだ知らない作曲家が沢山いるので全シリーズに目を通したいと思っている。



他奏楽友社 ● 766-57 C 記号請求
『ブラームス』ライブラリー
作曲家別名曲解説ライブラリー 7 (音楽之友社 1993)

●のすえ あやこ 今紹介させて頂いて、一人でも多くの人達がこのシリーズを役立ててもらえたら嬉しいです。音楽がより楽しくなると思いますよ。

CD 「作業のお供に」

河村さとみ

音楽文化デザイン学科 2年

ステイヴ・ライヒと言えばミニマル、ミニマルと言えばステイヴ・ライヒ、と言うのが私の認識である。ミニマル・ミュージックとは、端的に言えば、最小のモチーフを段々と微妙に変化させて奏される音楽だ。

「テヒルーム」は詩篇を表すヘブライ語で、聖歌（あるいは賛美歌）を意味する言葉である。その名の通り、この曲は聖書の詩篇（ヘブライ語）をそのまま歌詞に使用している。女声4声、4パートからなる曲だ。

これはあまりライヒのミニマルらしくはないのだが、非常にきれいで聞きやすい曲なので、ミニマルは聞いた事がない・苦手だ、と言う方には是非ともオススメしたい。

4人の女声によるコーラスと、他の楽器との組み合わせが絶妙である。特に、この曲において多用されている「打楽器」とリズム形態が素晴らしい (Part II&IV においてリズムがはっきりしたすの曲の半分すぎであるが)。

タイトルからいわれる「キリスト教の聖歌っぽい音楽」、と言うものを想像してCDをかけると、多少驚くかも知れない。女性のコーラス一つ一つは西洋音楽らしさがあるが、ちよつと聞くと、やはり普通ではないな、と思えるは

ずだ。

打楽器が多用されているのは、「太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ／弦をかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ／シンバルを鳴らし神を賛美せよ」と言う歌詞が含まれているからだろうか。声は非常に高く清らかで、一つ一つの音の重なりも濃厚だが、軽やかで美しい。

この曲を私はヒーリング・ミュージックの一種でもあると思うのだが、やはりそれはミニマル・ミュージックを聞き慣れた人間の発想なのかもしれない。

ミニマル・ミュージックは聞き慣れないと聞いているのが辛いかもしれない（現に私も昔はそうだった）。しかしとりあえずは我慢して、1曲、いや、アルバム1枚を通して聞いてみることを薦める。ちよつと良いかも、と思つたらこつちのもの。個人的意見で大変恐縮だが、ライヒのミニマルは作業用BGMにすることを本気でオススメする。

単純作業（あるいはレポート作成）のお供には非ミニマルをどうぞ。



請求記号●XD26953
スティーヴ・ライヒ
『テヒリム』

●かわむらさきとみ「一番好きな曲はElectric Counterpointですが、これは図書館に入っていないので皆様是非購入してください。」

Book

音楽が本へと導く

木元佐代子

音楽文化デザイン学科 2年

私が黒人霊歌を知ったのは小学生の時、《深い河》という黒人霊歌が『トンプソンピアノ教本』にあり、それを演奏したことがきっかけであった。当時、黒人霊歌に関する説明を読み、衝撃を受けた覚えがある。黒人霊歌とは一口で言うならば、主にアフリカ大陸からアメリカ大陸に連れてこられた黒人奴隷のコミュニティの中で生まれた音楽だ。《深い河》は今回紹介する本のタイトルの一部でもあるが、有名な黒人霊歌の一つである。彼らの悲しみが奥底から滲み出てくるようなメロディーと歌詞。この歌は10年近くたった今も私の心を離れない。

私は現在音楽療法を中心に音楽を学んでいるのだが、当時奴隷として扱われた人々にとつて音楽がどのような存在であり、また、どのような影響を与えていたのかを知りたい、そう考えた際に出会った本がこれだ。もちろん彼らの苦しみと、現代社会において様々な要因で苦しんでいる人々の辛さや悲しみを天秤に掛けることは決してできないが、そこには音楽がもたらす何か共通する部分が存在するだろう。それは、音楽療法的要素はもちろん、音楽の本質的なものであるに違いないと思うのだ。

また、大学に入学して再び黒人霊歌に注目

した要因の一つとして《We Shall Overcome》という歌を知ったことが大きい。この歌は1950年代から1960年代にかけて行われたアメリカ公民権運動（黒人が公民権の適用を求めて行つた大衆運動）のプロテストソングなのであるが、『It'll Overcome Someday』という黒人霊歌から変容し、今日においても歌われて続けている。私は先日偶然ではあるが、この歌を歌うという体験を得、黒人霊歌からの関連性はもちろん、音楽と社会の関係についても大いに考えさせられた。

最後に、本書導入部分の次のような印象的な記述を紹介したい。「奴隷制があつたおかげでこのような素晴らしい音楽にめぐり合えたなどと感謝する気持は毛頭ない」私はこれに大いに賛同する。しかし黒人霊歌がジャズをはじめ、ロックなどの様々な音楽に受け継がれ、また私自身をそれらに導いてくれたことは確かなる真実なのだ。悲しみの音楽は人間が存在する限り、これからも絶え間なく生まれるだろう。しかしその音楽が少しでも、悲しみに暮れている人々の心の支えとなればよい。私はそう考えている。



請求記号●C65-231
小川洋司『深い河のかなたへ』
黒人霊歌とその背景（音楽之友社 2001）

●きもとさよこ「最近のお気に入りの本は『本棚三昧』。人の本棚ってどうしても気になってしまうのです。」